



Viet Nam

学校名：東京都立青梅総合高等学校

氏名：川上 絢子

[担当教科：国語]

- 実践教科等：現代文
- 時間数：20時間
- 対象生徒：高校3年生
- 対象人数：39人×3クラス

1 単元名

「虚ろなまなざし」「南の貧困/北の貧困」「戦争の〈不可能性〉」

2 単元の目標

- ・地球規模の課題を自分事として捉えることができる。
- ・「誰一人取り残さない」というSDGsの視点から「幸せ」の定義を考えることができる
- ・「幸せ」な社会を実現させるための具体的な方法を考えることができる

ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度(国立教育政策研究所が例として示したもの)

- ①批判的に考える力
- ②未来像を予測して計画を立てる力
- ③多面的、総合的に考える力
- ⑥つながりを尊重する態度
- ⑦進んで参加する態度

3 単元の指導について

(1)教材観

本実践は、三つの評論文を読み進めながら、「幸せ」を考えさせていくという単元である。誰一人取り残さないというSDGsの視点に立っていること、また理想論で終わらない「幸せ」を考えさせるため、三つの評論文(「虚ろなまなざし」「南の貧困/北の貧困」「戦争の〈不可能性〉」)において以下のポイントを押さえる。

「虚ろなまなざし」の中での筆者の主張は、①先進国である我々は、写真(「ハゲワシと少女」)の中の少女に対し、自分の経験則に基づいてなかば「暴力的に」感情を投影していること、②そのように恣意的な同情や哀れみを向けるのは、少女が今にも餓死してしまいそうな原因が自分たちにあるという事実から目を背ける為のものである、という二つである。この二点は、人間という生き物の本質を鋭く突いている。

①を読み解く時には、生徒たちの過去の経験と比較させる。生徒たちの多くは小・中学校の時に、途上国に文房具や古着を送るという体験をしているが、それは学校からの働きかけで行われたものが多く、実際に途上国の人たちの心にまで耳を傾けた活動だったとは言い難い。物がなくて困っている状況に変わりはないかもしれないが、支援する際に大切にしてほしいことは、途上国の人々の心に寄り添い、心の声に耳を傾ける姿勢だ。その心を持ち合わせていない支援は、本文にもある真の「ヒューマニズム」と言えるのだろうかという指摘で、生徒を揺さぶる。国際協力を「したつもり」で終わらせないことが肝要だと、本研修を通して授業者が学んだことだからだ。②では、地球規模の課題に自分達が大きく関わっていることをまず自覚させる。それによって、生徒たちが地球規模の課題解決へ内発的に向かう姿勢を育みたい。

「南の貧困/北の貧困」では、①先進国が生み出した貨幣経済に、南の人々が強制的に組み込まれたこと、②またそれによって貨幣が一元的な価値尺度になり、相対的に貨幣量が少ない途上国の人々が「貧困」層となっていることをおさえる。①②を通じて、批判的なものの見方の重要性をおさえる。例えば、貧困の定義に金銭面以外の側面が入っていないことを扱う際には、「豊かさ」をはかる尺度に他にどんなものが挙げられるかを考えさせる。また未だに南が貧困から抜け出しづらい構造となっているのは、先進国のエゴによるものであり、また自分たちも南の人たちを振り回してきたその先進国の一人であるという自覚を持たせる。南北問題の加害性について、歴史を現在の自分たちの生活と結びつけながら、私たちの責任とこれからの立場を考えたい。

「戦争の〈不可能性〉」での筆者の主張は、①現代の「平和」は、核の抑止力によって戦争が起こせない状態であるにすぎず、各国が主体的に戦争を放棄したわけではないこと、②科学技術の発展（核兵器）が人間存在の条件である主体性を喪失させているという二点である。「戦争の目的は、自己の保存と強化である」という一文も用いながら、次のことを押さえたい。人間は戦争などの極限の生命の危機に瀕した時、自分（達）さえ生き残ればよいという自分本位の生き物になる性質があること、また科学を発展させた終着点がある歴史を学ぶことの意義や人間という生き物の本質を考える。

これらの要点をおさえながら、生徒に自分事として、先進国に生きる一人としての地球的な視野から、「誰一人取り残さない幸せ」を考えさせる。

(2) 生徒観

素直で明るく、教員に積極的に話しかけてくるなど、人懐っこい生徒が多い。教員の指示をよく聞き、毎週行う小テストなども手を抜かずに取り組んできた実直さがある。しかし裏を返すと、指示を待つ行動するため判断力や、常識を自分で捉え直すような批判的思考力が弱い。また、生徒たちは青梅という土地柄も相まって、地球規模の課題と自分自身との繋がりを感じる事がほとんどない。

本実践を通し、卒業を控えた生徒たちの、地球に生きる一人としての自覚、地球規模の課題を自分事として捉え内発的に国際協力へ関わろうとする姿勢を育みたい。

(3) 指導観

本研修に参加するまで現代文の授業の特性に息苦しさを感じていた。現代文では、芸術、情報、国家論、文化等の多岐にわたるジャンルを扱いながらも、実社会と分断された教室という空間のみで授業が完結することが多く、紙上でテストされて終わってしまうからである。確かに、筆者の主張を読み取らせる作業は、正確な読解力を身につけていく上で非常に有効だ。また、社会を批判的に捉え直す筆者たちの視点や論法は何年たっても普遍的な輝きを放ち、私たちに多くの示唆をもたらす。しかし、扱う評論文は年代が古くて情報の鮮度がやや落ちるものがあったり、教室内で完結することによって、机上の空論で終始し、生徒たちの中に根付いていかなかったりするものも多い。本研修での学びを通して、現代文の授業はテキストを読解することに終始せず、テキストを入り口にしてダイナミックな実社会を読み解き、生徒が自分で実社会と授業での学びを繋げていく授業を行わなければならないという思いが高まった。

そこで、まず三つのテキストを通して、地球が抱える課題を生徒たちが自分事として捉えること、また、今起こっている現象を自分達で読み解くレンズとして SDGsが彼らの中で息づく指導を行う。二年次の現代社会の授業の中で生徒たちは「SDGs」に触れていたもので、今回の単元を通し、SDGsがこの世界を捉え直すレンズとして生徒達の中で生きる意識付けをしたい。また、卒業学年の担任として、生徒たちには世界の広さと自分たちが独りではないことを感じさせたい。ベトナムから成田空港に降り立ち、家路についたバスの中で、今この瞬間もベトナムではあのバイクの群れが走っているのだろうと、世界を平行に感じた瞬間があった。それは日本に生き、日本を感じるだけでは感じるこのできなかつたであろう何とも言いえない安心感だった。卒業後、生徒たちが何かしらの苦難や孤独に直面したとき、この授業を思い出して、孤独や困難に負けずに生きてくれることを願っている。

4 評価規準

観点	関心・意欲 ・態度	話すこと ・聞くこと	読むこと	書くこと	知識・理解
評価規準	・地球規模の課題を自分事として捉えようとしている。 ・地球規模の課題の解決策を考えようとしている。	・グループで思考が整理出来るよう、適切な質問やまとめができる。	・「誰一人取り残さない幸せ」を考える切り口として、三つの評論文の筆者の主張を読解することができる。	・「誰一人取り残さない幸せ」を定義し、具体策を考えることができる。	・SDGsの視点から社会の課題を発見することができる。
評価方法	・ワークシート ・観察	・全体、グループ内での発言	・全体、グループ内での発言 ・ワークシート	・ワークシート	・写真 ・ワークシート

5 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
0	SDGsの視点から世界をみつめよう	・世界をSDGsという視点で捉え直すという視点を得る。	・夏休み中に、2つのSDGsに関係している写真を1枚撮影してくる。
1	「虚ろなまなざし」	・途上国に対する先進国に生きる自分の向き合い方を捉え直す。	・「虚ろなまなざし」の中で主張される「暴力的な主体化」について理解を深める。 ・真の「ヒューマニズム」について自分の考えを深める。
2	「南の貧困 ／北の貧困」	・南の貧困問題は先進国の私たちが原因であるという事実を踏まえ、解決策を考える。	・世界の貧困問題の現状を知る。 ・貧困問題の原因が自分たち先進国にあることを踏まえ「幸せ」を考える。 ・「開発」について再考し、環境と人間に与える影響についての自分の考えを深める。
3	「戦争の 〈不可能性〉」	・現在の「平和」は核抑止力によるものであることを知る。	・現在の「平和」は、各国が主体的に選択した真の平和でないことを理解する。 ・科学の進歩により核兵器が誕生したが、人間の存在条件の「主体性」が失われたことをおさえる。
4	「幸せ」な社会の実現の為に、自分が取り組める具体的な行動を考える	・地球規模の課題の解決策として、自分が取り組める具体的な方法を考え、自分事として課題をとらえる。	・地球規模の課題の解決策として、自分が取り組める具体的な方法を考える。

6 授業事例の紹介

小単元名【「幸せ」な社会の実現の為に、自分が取り組める具体的な行動を考える】

(1) 指導案

(ア)実施日時 11月28日(水)第3限

(イ)実施会場 3年4組教室

(ウ)本時の目標

- ・「誰一人取り残さない」というSDGsの視点から「幸せ」の定義を考えることができる
- ・「幸せ」な社会を実現させるための、自分で具体的に行える方法を考えることができる

(エ)指導のポイント

- ・「世間」や「世界」の構造そのものを変えさせる意識ではなく、まず生徒自身の具体的な行動が世界全体を変えていくことに繋がることを意識させ、国際協力を自分事として感じさせること。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・ 評価方法)
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> ・自身の「幸せとは何か」の定義を振り返らせる。 ・本時の目標を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自身の「幸せとは何か」の定義を振り返る。 ・既習の三つの学習材のポイントを整理し、本時の目標を押さえる。 	個人	<ul style="list-style-type: none"> ・誰の視点による幸せか考えさせる。自分個人だけの幸せになっていないか。 ・既習事項の復習 (1) 南の貧困の原因は、我々先進国にある。 (2) 南は先進国のエゴによって、貧困から抜け出しづら社会構造になっている。 (3) 戦争の目的は自己の強化と保存という利益中心の考え方。 	観察

展開	「幸せ」な社会実現のための、自分を取り組める具体的な方法を考える			ワークシート	
	<ul style="list-style-type: none"> ・個人にとどまらない、地球規模の幸せを考えさせる。 ・課題解決に向けて、自分を取り組める具体的な方法を考えさせる。 ・視野を広げる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地球上の誰一人取り残さない「幸せ」を考える。 ・それを実現させるために、自分を取り組める方法で具体的なものを考える。 ・グループで意見交換する。 	個人		<ul style="list-style-type: none"> ・貧困に限らず、SDGsの中にある視点から考えて良い。 ・「世間」や「世界」を変えようという大それたものにならないように指示する。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・単元全体を振り返らせ、「幸せ」に対する考えを深めさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・単元の振り返りをワークシートにまとめる。 	個人	<ul style="list-style-type: none"> ・必ず全員意見をグループ内で発表させる。 ・心に引っかかった仲間の意見はメモを取らせる。 ・ベトナム人が考える「幸せ」をまとめた動画を流しておく。 	観察

(2) 授業の振り返り

生徒たちは、答えのない問いに対し誠心誠意考え抜いた。特に、「誰一人取り残さない幸せ」とは何か、また、その解決策を具体的に考えなければならないという活動によって地に足を付けて考えざるをえなかったようだった。

生徒のワークシートで多かったのは、「幸せ」は多様な定義を持ち存在しているという考えだ。本単元を通して、途上国の人々に対し自分自身が多くの決めつけを持っていたという気付きが衝撃的だったようである。だからこそ、自分が恣意的に「誰一人取り残さない幸せ」を決めたくないから途上国の人にまず聞いてみたいという意見が多く出た。これ授業者が大切にしたいと考えていた、まず相手の心に寄り添う姿勢であったので、正直とても嬉しかった。しかし、そういった決めつけに対する抵抗感を示しつつ、途上国の人々を苦しめる原因が自分たち先進国にあったという歴史や、今の自分たちの立場を振り返り、これまで自分自身の幸せしか考えてこなかったことに気付いたからこそ、これから地球に生きる人を誰も取り残さないという視野で、何かできることを始めていきたいと熱くなっている生徒が多く見受けられたことも本単元の成果として挙げたい。

また、生徒の具体的な解決策として、「食べ物を残さない」や「電気をこまめに消す」「無駄をなくす」等、日常でよく耳にするものが多く挙げられたが、この地球課題を何とかしなければならないという強い使命感からのものであることが、生徒たちの真剣な表情から読み取ることができた。そして興味深いものとして、「差別・偏見をもたない」「伝える・発信する」「相手や現状を知ること」といった意見が出た。生徒たちの心の中に SDGs の視点が生まれたことをとても嬉しく頼もしく思ったし、誰かに強要されたり、言わされたりした考えではなく、本単元によって生徒たちの中からこういった「平等」や「相互理解」「国際協力」に対する想いが自発的に出てきてくれる度に、「誰一人取り残さない幸せ」の実現に一步近づいていくように感じた。

今回実践後心残りなのは、具体策を個人のもののみで考えさせたことである。まずは個人の意識や行動が変化していくことが大切になるが、一人の力には限界がある。それを集団にどう働きかけて大きなムーブメントにしていくのかという視点を今回設けていなかった。もう一度この単元を扱う時には、この視点をもって具体策を考えさせていきたい。

(3) 使用教材

- ・岡真理「虚ろなまなざし」
- ・見田宗介「南の貧困/北の貧困」
- ・西谷修「戦争の〈不可能性〉」
- ・SDGs17の目標
- 「国連開発計画(UNDP)駐日代表事務所」

<http://www.jp.undp.org/content/tokyo/ja/home/sustainable-development-goals/resources.html>

JICA 教師海外研修 授業実践報告書フォーマット

・ワークシート①「あなたの考える幸せとは何ですか？」

・ワークシート②「誰一人取り残さない幸せを、具体的に実現させる方法を考える」

ワークシート①「あなたの考える幸せとは何ですか？」

ワークシート②「誰一人取り残さない幸せを、具体的に実現させる方法を考える」

(4) 参考資料等

・「国連開発計画(UNDP)駐日代表事務所」

<http://www.jp.undp.org/content/tokyo/ja/home/sustainable-development-goals/resources.html>

・「EARTH COMPANY 2017 キャシー・ジェットニル=キジナー」

<https://www.earthcompany.info/ja/impact-hero-2017-kathy-jetnil-kijiner/>

7 単元をととした児童生徒の反応/変容

青梅の豊かな自然の中で育った生徒たちは、地元志向が強かった。勤務校は、国際交流に注力しており、海外修学旅行(グアム)やドイツとの姉妹校交流等のプログラムを経験しても、最終的な進路決定の場面では、いかに自分の家から近いか、いかに慣れた環境に身を置くかということが基準になっていることに強い課題意識があった。可能性を秘めているこの子たちの可能性と視野を広げたい、これが教師海外研修に応募したきっかけの一つだった。

単元をととして見られた生徒の変容は大きく以下の二点だ。

一点目は、生徒たち自身が他国に生きる人たちとの繋がりを感じ始めたことである。二点目は、生徒たちの視野が地球規模にまで広がり、地球規模の課題を自分事として捉え、解決に対する思いが内発的に起こってきたことだ。

一点目については、評論文を読み進めながら「幸せ」を考える上で核となるポイントを押さえていくにつれて、自分がこれまでいかに地球規模の課題について適当に考えてきたかという感想が多かった。貧困も、環境破壊も、世界のどこかで起こっていることであって、自分の生活圏には入ってこないものという意識があったようだ。また、自分たちの生活がこの地球上の誰かの暮らしを脅かしているという事実が、今回自分事として捉える大きなきっかけになっていた。キャシーさんの詩だけでなく、例えば、自分たちの持ち物の中にベトナム製の製品があるが、その製品を作る人たちの労働環境や条件について目が向いたり、日本のコンビニのアルバイトにベトナム人や外国人労働者が多かったりすることを思い出し、またその変遷を考える上で学習した世界史や現代社会の知識と繋げたことで、地球規模の課題が生徒たちの眼前に迫ってきたようである。

二点目については、これまで生徒たちは3(1)の教材観でも述べたが、古着やペットボトルの蓋集めを小・中学校の教員に言われるがまま参加してきたが、今回評論文の中で自分たちの経験則から勝手に途上国の人たちの感情を想像している可能性があるという指摘に大いに揺さぶられ、自分達はもしかしたら本質からずれた支援をしたのではないかと支援の根幹を問い直す生徒の感想が多く見受けられた。また、募金や物資を送るだけで終わっては根本的な課題解決になっていないかもしれないという気づきから、進路を選択するうえで、国際協力に携われるようなものに興味を強くひかれた生徒も出てきたことが嬉しかった。また、「決まった職業に自分を当てはめるのではなくて、自分のしてみたいことが職業になるよう考えてみようかな」とわざわざ話に来てくれた生徒が出てきてくれたことも、青梅に新しい風が吹いているように感じた。生徒たちの顔が、本単元で現実と向き合い、少し大人びたのが印象的だった。

8 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

・実際にベトナムでの驚きや感動を授業の中心に組み立て、生徒と共有してみたいという思いから、派遣前研修の時授業案はほぼ白紙だった(ごめんなさい)。1月13日(日)の東京都報告会の発表の中でいくつか述べたが、今回の授業の核となった出来事は①佐藤教授から教えて頂いた4つのレンズのお話②よりよい生活を求める人間としての欲求③モー村でのストール④モー村で撮った子どもたちとの写真、⑤ツーズー平和村での子どもたちとの出逢いだ。

①は、グローバル化が急速に進む現代においては、一つの事象の中には課題がいくつも混在している。例えば、水環境改善のプログラムに参加した時に、水質環境が劣悪な地域を環境問題として捉えるだけでなく、劣悪な環境には低所得者が集まって生きているという別の見方をすると、そこで埋もれてしまっていた経済格差の問題を抱えた人々を見つけることができる。ベトナムのバイク問題も、環境問題として捉えるだけでなく、バイクの乗っている種類などに着目すると経済格差の視点からとらえ直すことができる。このような視点を身につけると、声にならない助けを求める人たちを救うきっかけを得ることが出来るということに気付いた。

②では、豊かな日本で平成を生きてきた自分は、「よりよい生活」を求める感覚が掴めなかった。しかし、モー村で子どもによりよい暮らしをしてもらうために現金収入がほしいと切実に話す母親の表情や、トイレ、シャワー室の日本とはかけ離れた状況で一日生活をしたときに誰かをうらやましく思うという気持ちがいさだけ感じられた気がした。

③では、ホームステイ先のご家族が本当に心温まるおもてなしをして下さったので、何か恩返しを考えていた。その時に②で述べた会話の中で現金が欲しいという言葉を出したので、その母親の家で売っていたストールをお礼に買えば、恩返しになるのではないかと考えた。しかし、母親は、その瞬間から私を「現金をくれる人」として捉え直し、ほかのポーチやポシェットを勧めてくるようになってしまった。良かれと思ってしたことだったが、何とも言えない残念な気持ちになってしまった。私はこの先、この母親に常に現金を渡し続けられるわけではない。これが国際協力として考えた時に、親切心とはいえ、一時の感情に流されるのではなく、この母親が安定した現金収入を得られる仕組みを作る等の働きかけが大切なのだと痛感した。

④では、モー村でメンバーが撮ってくれた子どもたちとの写真である。その写真にはモー村に生きる子どもたちとモー村の田園風景、日本人の私、そして戦争時にこの村に落とされた爆弾が写っている。何気ない一枚の中に、「繋がっている」ことを感じた。日本人の私が、グローバル化が進んだことによって簡単にこの村に存在できるということ、そして戦争に代表されるようなこの村に流れてきた歴史の上に立っているということ、そして私もこの歴史を作っているということ。現代文の授業の中で度々目にする「グローバル化」ということの意味を体感した一枚である。

⑤は、私に一番の衝撃をもたらした出来事だったが、枯葉剤の影響を受けた子どもたちとの出逢いである。まず、ベトナム戦争の影響がこの時代にまで存在しているということ、そして人為的な要因によってこういう運命を背負った子どもたちが生きているということ、そして何よりこの事実を知らずに生きていた自分という存在に気付いたことが、自分に重くのしかかってきた。歴史を学ぶことの意義を痛感し、また、この現実を生徒たちに思いをもって伝えることが、日本に帰ってからの使命であると感じた。

上記の①～⑤の気付きを感じながら、ベトナムでの研修を通して心の中ではずっと「幸せとは何か」という問いがあった。答えのない問いだからこそ、素直に生徒にぶつけて一緒に考えてみたいと思った。そして、ただ理想論として「幸せ」を語って終わらせず、未来に繋げていけるよう具体的な一歩を踏み出させたいという思いで本時では、生徒たちが具体的に実践できる行動を考えさせた。

9 教師海外研修に参加して

教師海外研修に参加して、胸が震えるものにたくさん出逢えました。メンバーや JICA の皆さんとの出逢い、現地に出会った方々が胸に抱く国際協力への想い、そして、自分という人間と向き合う機会、そして大きく変容した生徒たち。研修の中で、教師海外研修は行って終わりではないと何度もお話をされました。今その意味を考えています。自分がこの時代に日本人として生まれ、これから何がしなければならないのか、教員として、一人の人間として何ができるのか。この大きすぎる宿題を、次に出逢う生徒たちと一緒にまた考えていきたいです。ここから、また私の人生が始まるのだとワクワクしています。このような機会を頂けたこと、出逢ってくださった方々皆さんに感謝の気持ちをお伝えしたいです。本当にありがとうございました。